

ペルシア語を母語とする日本語学習者における
日本語のアスペクト形式「テイル」の習得の横断的研究

A cross-sectional study on acquisition of Japanese aspect marker “-teiru” by
Persian-speaking learners of Japanese

シャフバーズィー ヤセル
SHAHBAZI, Yaser

摘要

The purpose of this paper is to analyze the acquisition situation of Japanese aspect marker “-teiru” by Persian-speaking learners. The meanings of “-teiru” studied here, are “progressive” and “resultative” which are known as basic aspectual meanings of it, and “resultative”, “perfect”, and “simple state” which are known as derivative meanings of it that are used more frequently than the other meanings such as “counter fact”, “experience” etc. Similar studies, specially about Chinese or Korean-speaking learners have been done so far. But this paper would be one of the first studies of this kind, on Persian-speaking learners, looking at Persian grammatical forms correspond to every function of “-teiru”, and possible native language.

After comparing different meanings of “-teiru” with the corresponding Persian grammatical forms, this study focuses on acceptance of every meaning of it by four groups of students (from first-year students to fourth-year students), in present form “-teiru” and past form “-teita”. Comparing the results with native speakers’ acceptance data, shows that the present “progressive” meaning of “-teiru” is the easiest meaning to understand for Persian-speaking learners, as mentioned in prior researches on other learners with different native languages. In contrast, in realization and acceptance of other meanings, such as past form of “repetitive”, “resultative” and “perfect” meanings, clear differences have been observed between students and native speakers. Particularly, aspectual differences of “repetitive” and “perfect” meanings of “-teiru” with the corresponding Persian forms leads to a large decrease in acceptance of “-teiru” form compared to native speakers. In some cases, although learners understood the correct aspectual meaning of the sentence, they tend to use Japanese “ta” form instead of “-teiru”. Furthermore, learners have difficulties in distinction between “ru” and “-teiru” in present “repetitive”, and between “ta” and “-teiru” in present “resultative” meanings. In “simple state”, although the acceptance of “-teiru” is high, but in some cases, the acceptance of “ru” and “ta”, even by fourth-year students is higher than native speakers.

キーワード：日本語教育、アスペクト、テイル形、ペルシア語

Keywords: Japanese language education, Aspect, -teiru, Persian

1. はじめに

テイル形（過去形のテイタ形も含まれる）の習得についての研究はこれまで数多く行なわれており、特に中国語や韓国語などを母語とする日本語学習者の習得状況を調査した研究が多い。しかし、ペルシア語を母語とする学習者（以下、簡単に「学習者」と呼ぶ）の習得状況はほとんど行われておらず、テイル形を含む日本語とペルシア語のテンス・アスペクト体系の対照研究もほとんどない。そこで本稿では、日本語とペルシア語のテンス・アスペクトに関する体系を整理したうえで、ペルシア語話者学習者におけるテイル形・テイタ形の習得状況を横断的に調査し、様々な要素の中、母語の干渉が誤用の原因として考えられるところを探り、今後の学習の際に、どのような点に注目すべきかという習得状況の改善への第一歩を目指した。

2. 日本語のテイル形・テイタ形に対応するペルシア語の文法形式

日本語のテイル形には、一般に「進行中」（犬が走っている）、「結果残存」（財布が落ちている）、「繰り返し」（毎朝ジョキングをしている）、「完了」（試合はもう始まっている）、「単なる状態」（彼女は母に似ている）などの意味があるとされる。

日本語教育において中国語話者や韓国語話者のアスペクトに関する研究は多いが、ペルシア語話者の研究はほとんどない。そこで、まず、Khomeijani (1990)、Rezāi (2012)、吉枝 (2011) などで指摘されているペルシア語のアスペクト体系を基に、これまでの記述を修正・拡張して、日本語のテイル形・テイタ形の用法との対応の結果をまとめた。これを表 1 に示す。

表 1 本稿で議論される用法の「テイル」と「テイタ」に対応するペルシア語の主な形式¹

	進行中	繰り返し	結果残存	完了	単なる状態
テイル	現在進行形	現在進行形	現在形 (状態動詞)	現在完了形	形容詞 + būdan ^{2*} (現在形)
	現在形 ³	現在形	現在完了形 ⁴		現在形
テイタ	過去進行形	過去進行形	未完了過去形 ⁵ (状態動詞)	過去完了形	形容詞 + būdan* (過去形)
	未完了過去形	未完了過去形	過去完了形 ⁶		未完了過去形
					過去完了形

*過去形の būdan は「でした」に対応するコピュラで、現在形の būdan は「です」に対応するコピュラである。

日本語の進行中を表すテイル形には、ペルシア語では(1)のように現在形が対応する。しかし、Rezāi (2012) が述べているように、現代ペルシア語ではこの形式の進行中の意味が弱まっております、進行中を表す副詞との共起などがなく、繰り返しなど他の意味と区別しにくい場合が多くなってきている。現代ペルシア語で進行中をより明確に表す代表的な方法は、(2)のような現在進行形(助動詞 *dāstan* (=持つ、現在形) + 動詞(現在形))である。同様に、進行中のテイタ形には未完了過去形が対応するが、現代ペルシア語では進行中をより明確に表す代表的な方法は過去進行形(助動詞 *dāstan* (=持つ、未完了過去形) + 動詞(未完了過去形))である。

- (1) Sag mīdavad. (現在形)
 犬 NOM 走る INTR-PRS-IPFV-3SG
- (2) Sag dārad mīdavad. (現在進行形)
 犬 NOM 持つ AUX-PRS-IPFV-3SG 走る INTR-PRS-IPFV-3SG
 (犬が走っている)

繰り返しを表すテイル形には現在形と現在進行形が対応するが、現在進行形の方は一時性の意味が出る(3、4)。同様に、テイタ形の場合は、未完了過去形と過去進行形があるが、過去進行形の方が一時性の進行を表す。

- (3) Tāro har rūz mīdavad. (現在形)
 太郎 NOM 毎日 ADV 走る INTR-PRS-IPFV-1SG
 (太郎は毎日走る／走っている)
- (4) Tāro az yek māhe pīš ta emrūz, har rūz
 太郎 NOM から DAT 一月前 ADV まで DAT 今日 ADV 毎日 ADV
dārad mīdavad. (現在進行形)
 持つ AUX-PRS-IPFV-3SG 走る INTR-PRS-IPFV-1SG
 (太郎は一カ月前から今日まで、毎日走っている)

結果残存と完了を表すテイル形には、主にペルシア語の現在完了形(過去分詞+助動詞 *būdan* (=ある／いる、現在形))(5、6)、テイタ形には過去完了形(過去分詞+助動詞 *būdan* (=ある／いる、未完了過去形))(7、8)が対応する。

- (5) kīf oftāde ast. (現在完了形)
 財布 NOM 落ちる INTR-PST-PTCP ある／いる PRS

(財布が落ちている)

- (6) alān mosābeqe šorū šode ast. (現在完了形)
 今 ADV 試合 NOM 始まる INTR-PST-PTCP ある/いる PRS

(試合は今、もう始まっている)

- (7) kif oftāde būd. (過去完了形)
 財布 NOM 落ちる INTR-PST-PTCP ある/いる PST

(財布が落ちていた)

- (8) vaqtī be estādiom resīdam, mosābeqe
 時 ADV に DAT スタジアム NOM 着く PST-1SG 試合 NOM-SG
šorū šode būd. (過去完了形)
 始まる INTR-PST-PTCP ある/いる PST
 (スタジアムに着いたとき、試合はもう始まっていた)

ただし、dānestan (知る)、fahmīdan (分かる)、motavaǰjeh šodan (気づく) などの状態動詞は例外で、現在完了形では (9) のような完了のテイル形、(10) のような過去完了形では完了のテイタ形を表すが、結果残存のテイル形を表すには (11) のような現在形、結果残存のテイタ形を表すには (12) のような未完了過去形が使用される。これらの動詞は Vendler の分類で状態動詞として分類されている英語の stative verbs に相当するもので、進行形にならないという特徴 (Dowty 1972、Bache 1985 など) は同様である。

- (9) ū alān dīgar haqīqat rā fahmīde ast. (現在完了形)
 彼 3SG 今 もう ADV 真実 NOM を ACC 知る TR-PST-PTCP ある/いる PRS

(彼は今もう真実を知っている)

- (10) ū ānvaqt haqīqat rā fahmīde būd. (過去完了形)
 彼 3SG その時 真実 NOM を ACC 知る TR-PST-PTCP ある/いる PST

(彼はその時もう真実を知っていた)

- (11) ū rā xūb mīšenāsam. (現在形)
 彼 3SG を ACC よく ADV 知る TR-PRS-IPFV-1SG

(彼のことをよく知っている)

- (12) ū rā xūb mīšenāxtam. (未完了過去形)
 彼 3SG を ACC よく ADV 知る TR-PST-IPFV-1SG

(彼のことをよく知っていた)

最後に、単なる状態のテイル形、テイタ形は主に2つの表現に対応している。一つは、人や

物の特徴を修飾する形容詞で、テイル形には (13) のような「形容詞 + būdan (現在形)」、テイタ形には (14) のような「形容詞 + būdan (過去形)」が対応する。

- (13) ū be mādar -aš šabīh ast. (形容詞 + būdan (現在形))
 彼女 3SG に DAT 母-NOM 彼女の GEN 同様 ADJ です PRS-COP
 (彼女は母に似ている)

- (14) ū be mādar -aš šabīh būd. (形容詞 + būdan (過去形))
 彼女 3SG に DAT 母-NOM 彼女の GEN 同様 ADJ でした PST-COP
 (彼女は母に似ていた)

二つ目は、人や物の存在によってできた状態（人が並んでいる／山がそびえている）や位置関係（あの川は町を2つに分けている）を表すものである。この場合は、テイル形には (15a) のような現在完了形と (15b) のような現在形、テイタ形には (16a) のような過去完了形と (16b) のような未完了過去形が対応する。

- (15) a. ān rūd šahr rā be do
 あの PRO 川 NOM 町 NOM を ACC に PREP 2NUM
 baxš taqsīm karde ast. (現在完了形)
 パーツ NOM 分ける TR-PST-PTCP ある/いる PRS

- b. ān rūd šahr rā be do
 あの PRO 川 NOM 町 NOM を ACC に PREP 2NUM
 baxš taqsīm mīkonad. (現在形)
 パーツ NOM 分ける TR-PRS-IPFV-3SG
 (あの川は町を2つに分けている)

- (16) a. ān rūd šahr rā be do
 あの PRO 川 NOM 町 NOM を ACC に PREP 2NUM
 Baxš taqsīm karde būd. (過去完了形)
 パーツ NOM 分ける TR-PST-PTCP ある/いる PST

- b. ān rūd šahr rā be do
 あの PRO 川 NOM 町 NOM を ACC に PREP 2NUM
 baxš taqsīm mīkard. (未完了過去形)
 パーツ NOM 分ける TR-PST-IPFV-3SG
 (あの川は町を2つに分けていた)

ペルシア語の時制は、完了アスペクトと未完了アスペクトに分かれている。進行形と繰り返しは基本的にペルシア語の未完了アスペクト、結果残存と完了はペルシア語の完了アスペクトの形式で述べられる。一方、単なる状態は、人や物の状態を表す場合は形容詞、配置関係を表す場合は完了アスペクトにも未完了アスペクトにも対応している。

しかし、イランでの日本語習得と教育の筆者の経験上、学習者はテイル形＝現在進行形、ル形＝現在形、テイタ形＝過去進行形、未完了過去形、タ形＝単純過去形と理解していることが予測される。そこで、本稿では学習者におけるテイル形・テイタ形の習得状況について調査した。

3. 研究方法

本稿では、テイルの意味、前接する動詞の語彙的アスペクト、学習期間の要因を分析の観点として、テイルと共起するの動詞の種類により、学習者の各グループにおける文のアスペクトの理解と使用する形式が母語話者とどう違うかということ調査の目的にした。

具体的には、動詞が進行中、繰り返し、結果残存、完了、単なる状態の意味を持つ文では、日本語を学習した筆者の経験上で間違えやすいと考えられる形式（ル形、テイル形、タ形、テイタ形）の中で、学習者が動詞の意味をどう捉え、どの形式を正しいと認識しているかを調査することにした。もちろん、動詞のアスペクト的な意味が文脈や副詞などにより左右することもあり、様々な要素が母語話者や学習者の選択に影響していると考えられるが、本稿ではその中で学習者の母語の影響が誤りの原因となるところを探った。

そこで、以上の5つのアスペクト的な意味に、異なる語彙的な意味の動詞を使う文を設定し、両者におけるテイル形・テイタ形の選択率を見るようにした。アンケートの質問と選択肢は、過去形のテイタ形と非過去形のテイル形に語彙的アスペクトの異なる動詞を示し、筆者（ペルシア語母語話者）の判断で進行中、繰り返し、結果残存、完了、単なる状態の解釈になると予測して、(17)のような四者選択テスト（複数回答可）を合計42問作成した。この際、学習者には捉えた文のアスペクト的な意味を確認するために、選択した全ての形式のペルシア語の訳を下線部に書いてもらった。

(17) 今、彼女は公園を（走ります、走っています、走りました、走っていました）。_____

これは学習者が各用法で選択した形式が日本語母語話者とどう違うか、考えられる様々な原因のうち、学習者の母語干渉が原因として考えられるところを探ったものである。

問題数が多いため、学習者のアンケートではテストの問題を2つに分けて、半分ずつ2回に

分けて実施した（母語話者は1回で全問実施した）。最後に、各用法のテイル形の選択率をパーセンテージで示した。

被験者はイランのテヘラン大学で日本語を専攻している学生83名（1年生22名、2年生27名、3年生19名、4年生15名の4グループ）と日本語母語話者34名である。

4. 結果と考察

学習者と母語話者のデータを比較して言えるのは、現在の進行中（テイル形）以外は、母語話者と比べて、学習者におけるテイル形、テイタ形の選択率はル形やタ形より全体的に低いという点である。教科書などで提示されている例文は主に現在の例なので、特にテイル形の場合は同じ例が頻繁に出ており、常に決まった形で使われているような「固まり」として習得されていると思われるものもあり、選択率が高いところもあったが、テイタ形の場合は学習者の選択率と母語話者との差が大きいところが多い。特に結果残存や完了のテイタ形では学習者と母語話者の選択率の差が大きく、ル形とテイル形、タ形とテイル形、タ形とテイタ形の意味の認識や使用に問題があることが分かった。また、アンケートは質問数が多かったため、できる限りシンプルで短い文を使用した結果、文のアスペクト的な意味を表すには、副詞を共起させなければならないという制限があり、母語話者や学習者が迷うところもあった。

以下、ペルシア語を母語とする学習者のテイル形の習得について、日本語のテイル形の意味別に進行中、繰り返し、結果残存、完了、単なる状態の順に見ていく。

4. 1. 進行中

進行中の意味を表すテイル形の場合は、学習者における選択率が母語話者に近く、学習期間が長くなるにつれ、母語話者と同じパターンになる傾向が見られる。それに対し、テイタ形では、母語話者との差が4年生でも比較的大きい。学習者と母語話者における進行中のテイル形（18～21）とテイタ形（22～25）の選択率を表2に示す。

（18. 今、彼女は公園を走る）と（19. 今、彼女は食堂でたくさんご飯を食べる）は、非変化動詞がテイル形と共起した進行中の典型的な例である。この場合、母語話者はほぼ全員がテイル形を選択している。一方、学習者は学習期間が長くなるにつれ、進行中の意味を表す「今」とテイル形の組み合わせが固まってくるため、全体的にテイル形の選択率が上がり、ル形の選択率が2割以下になる傾向がある。（20. 今、母は弁当を作る）と（21. 今、父は車を洗う）では、非変化動詞（作る、洗う）が使用されているが、この場合も母語話者はほぼ全員がテイル形を選択している。学習者もテイル形の選択率が1年生の時から高く、上の（18. 今、彼女は公園を走る）と（19. 今、彼女は食堂でたくさんご飯を食べる）と同様に、ル形の選択率が低い。これらの動詞とテイルとの共起では（18）と（19）よりもテイル形を選択しやすいこと

が分かる。しかし、テイタ形の場合（22～25）は、母語話者はいずれもほぼ 100%がテイタ系を選択しているが、学習者は 1 年生の時はテイタ形の選択率が 30～60%程度で 4 年生になってもテイタ形の選択率が 60～70%程度に留まり、母語話者との差が大きい。この場合、母語話者のタ形の選択率は（23. その時、彼女は食堂でたくさんご飯を食べる）以外は 20%程度であり、学習者は 4 年生でも選択率が 30～40%ほどと母語話者より高くなっている。これは、学習者がタ形に対応するペルシア語の単純過去の完成の意味を、進行の意味より優先するためだと考えられる。

表 2 進行中のテイル形とテイタ形の選択率 (%) ⁷

テイル形						テイタ形					
18. 今、彼女は公園を <u>(走る)</u> 。						22. その時、彼女は公園を <u>(走る)</u> 。					
	1*	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	16.7**	10.5	11.1	13.3	5.9	ル	15.8	10.5	0	0	14.7
テイル	83.3	84.2	88.9	86.7	100	テイル	0	0	0	0	8.8
タ	0	0	0	0	5.9	タ	26.3	52.6	33.3	28.6	20.6
テイタ	0	5.3	0	0	29.4	テイタ	57.9	36.8	66.7	71.4	100
19. 今、彼女は食堂でたくさんご飯を <u>(食べる)</u> 。						23. その時、彼女は食堂でたくさんご飯を <u>(食べる)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	31.8	25.0	10.5	6.7	20.6	ル	9.1	8.0	0	0	5.9
テイル	63.6	75.0	89.5	73.3	97.1	テイル	0	0	0	0	5.9
タ	4.5	0	0	6.7	5.9	タ	45.5	72.0	57.9	46.7	61.8
テイタ	0	0	0	13.3	11.8	テイタ	45.5	20.0	42.1	60.0	100
20. 今、母は弁当を <u>(作る)</u> 。						24. その時、母は弁当を <u>(作る)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	15.8	10.5	5.6	0	14.7	ル	5.3	0	0	0	5.9
テイル	84.2	84.2	94.4	100	91.2	テイル	10.5	5.3	0	0	5.9
タ	0	0	0	0	29.4	タ	47.4	57.9	55.6	46.7	28.5
テイタ	0	5.3	0	6.7	17.6	テイタ	36.8	36.8	44.4	60.0	100
21. 今、父は車を <u>(洗う)</u> 。						25. その時、父は車を <u>(洗う)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	4.8	3.8	0	0	11.8	ル	0	4.0	5.3	0	0
テイル	95.2	96.2	100	100	100	テイル	23.8	4.0	0	0	2.9
タ	0	0	0	0	11.8	タ	42.9	36.0	63.2	40.0	17.6
テイタ	0	0	0	0	26.5	テイタ	33.3	56.0	31.6	60.0	91.2

*1: 1 年生 (22 名)、2: 2 年生 (27 名)、3: 3 年生 (19 名)、4: 4 年生 (15 名)、母: 母語話者 (34 名)

**母語話者のパーセンテージの合計が 100 を超えているところがありますが、それは複数回答が許されたからである。学習者にも同じ説明があったが、ほとんどの場合 1 つの回答のみを選択した傾向があったため、パーセンテージの合計は (ほぼ) 100 になっている。

4. 2. 繰り返し

次に繰り返しの選択率を表 3 に示す。ここでは「現在」の繰り返しの意味を強調するため、

「今」という副詞を使用した⁸。現在の繰り返しでは、母語話者はテイル形を選びやすいが、(28. 今、店の前に毎日ゴミが落ちる) 以外は、ル形の選択率も 30~60%程度である。学習者は、(29. 今、家の前で毎日交通事故が起きる) と (31. 今、父は毎日車を洗う) 以外は、学習期間が長くなるにつれ、母語話者のテイル形の選択率との差が小さくなる。これは、動詞の繰り返しの意味をル形より正確に表すテイル形の機能を認識するようになるからだと考えられる。(26~32) では、動詞の語彙的意味に関わらず、どの学年でも、ほとんどの学習者がペルシア語の現在形で訳しており、「繰り返し」というアスペクト的な意味を認識していることが分かる。(28. 今、店の前に毎日ゴミが落ちる) や (32. 彼は今、毎日彼女のことを考える) では、学習者にもテイル形の方が選びやすいところもあるが、ペルシア語では通常現在の繰り返しはル形に対応する「現在形」で表すため、ル形の方を選びやすい文 (31. 今、父は毎日車を洗う) やル形とテイル形の選択率が近い文 (29. 今、家の前で毎日交通事故が起きる) もあり、動詞の特徴などによる決まった傾向は見られなかった。

繰り返しのテイタ形 (33~39) の場合は、母語話者はテイタ形の選択率の方が高いが、動詞の完了の状態の繰り返しの方が捉えやすい変化動詞の (35. 昔、店の前に毎日ゴミが落ちる) 以外はタ形の選択率も 30~70%程度である。

学習者のほぼ全員がペルシア語の未完了過去形を訳として提示しており、「繰り返し」というアスペクト的な意味を理解していることが分かる。しかし、テイタ形の許容度がもっとも高いが、過去の「繰り返し」をタ形で表すことも可能であるのに、(37. 昔、母は毎日弁当を作る) 以外は、タ形の選択率はテイタ形より圧倒的に低い。その理由は次のように説明できる。ペルシア語では、過去の習慣的な繰り返しは、テイタ形に対応する形式として教えられる「未完了過去形」でしか表現できないため、初級レベルの学習者に対しては、テイタ形=未完了過去形、タ形=単純過去形と教えられる。しかし、タ形にはペルシア語の「単純過去形」で表すことができない繰り返しの意味を表す機能もある。そのため、過去の習慣的な繰り返しを表すと考えられる文に、学習者はテイタ形を選ぶ傾向があり、4年生になってもタ形の選択率が母語話者より低い。

表 3 繰り返しのテイル形とテイタ形の選択率 (%)

テイル形						テイタ形					
26. 今、彼女は毎日公園を (走る)。						33. 子供の頃、彼女は毎日公園を (走る)。					
	1*	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	52.6	52.6	50.0	33.3	82.4	ル	5.3	10.5	11.1	0	5.9
テイル	47.4	57.9	50.0	66.7	100	テイル	15.8	0	11.1	7.1	5.9
タ	0	0	0	0	5.9	タ	26.3	31.6	33.3	21.4	29.4
テイタ	0	0	0	6.7	11.8	テイタ	52.6	57.9	44.4	71.4	94.1

27. 今、彼女は毎日たくさんご飯を <u>(食べる)</u> 。						34. 子供の頃、彼女は毎日たくさんご飯を <u>(食べる)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	50.0	52.0	42.1	33.3	41.2	ル	22.7	0	5.3	0	0
テイル	45.5	40.0	57.9	66.7	85.3	テイル	0	8.0	0	0	0
タ	0	4.0	0	0	0	タ	31.8	32.0	36.8	14.3	35.3
テイタ	4.5	4.0	0	0	5.9	テイタ	45.5	60.0	57.9	85.7	97.1
28. 今、店の前に毎日ゴミが <u>(落ちる)</u> 。						35. 昔、店の前に毎日ゴミが <u>(落ちる)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	26.3	31.6	27.8	13.3	0	ル	15.8	0	0	0	0
テイル	68.4	57.9	66.7	86.7	97.1	テイル	10.5	10.5	0	0	0
タ	5.3	0	0	0	5.9	タ	15.8	26.3	22.2	6.7	8.8
テイタ	0	10.5	5.6	0	5.9	テイタ	57.9	63.2	77.8	93.3	97.1
29. 今、家の前で毎日交通事故が <u>(起きる)</u> 。						36. 昔、家の前で毎日交通事故が <u>(起きる)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	45.5	37.5	63.2	50.0	29.4	ル	4.5	0	0	0	0
テイル	45.5	45.8	26.3	42.9	88.2	テイル	9.1	0	0	0	8.8
タ	4.5	16.7	5.3	7.1	17.6	タ	22.7	33.3	23.5	20.0	70.6
テイタ	4.5	0	5.3	0	5.9	テイタ	63.6	66.7	76.5	80.0	73.5
30. 今、母は毎日弁当を <u>(作る)</u> 。						37. 昔、母は毎日弁当を <u>(作る)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	36.8	73.7	83.3	33.3	44.1	ル	15.8	21.1	0	0	0
テイル	52.6	26.3	16.7	66.7	85.3	テイル	0	0	0	0	0
タ	5.3	0	0	0	0	タ	47.4	36.8	50.0	46.7	64.7
テイタ	5.3	0	0	0	0	テイタ	36.8	42.1	50.0	60.0	94.1
31. 今、父は毎日車を <u>(洗う)</u> 。						38. 昔、父は毎日車を <u>(洗う)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	47.6	60.0	68.4	71.4	32.4	ル	18.2	8.0	5.3	0	0
テイル	52.4	40.0	31.6	28.6	100	テイル	4.5	0	0	0	0
タ	0	0	0	0	0	タ	18.2	32.0	15.8	20.0	41.2
テイタ	0	0	0	0	5.9	テイタ	59.1	60.0	78.9	80.0	100
32. 彼は今、毎日彼女のことを <u>(考える)</u> 。						39. 彼は昔、毎日彼女のことを <u>(考える)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	33.3	52.0	42.1	33.3	55.9	ル	19.0	4.0	5.3	7.1	0
テイル	66.7	48.0	57.9	66.7	97.1	テイル	14.3	0	0	7.1	0
タ	0	0	0	0	0	タ	28.6	32.0	15.8	14.3	41.2
テイタ	0	0	0	0	0	テイタ	38.1	64.0	78.9	71.4	100

*1: 1年生、 2: 2年生、 3: 3年生、 4: 4年生 母: 母語話者

4. 3. 結果残存

次に結果残存の場合の選択率を表4に示す。母語話者のテイル形の選択率は70%以上であるが、タ形やテイタ形も高く選択されているものもある。(41. 太郎は今日眼鏡をかける)では、ル形の選択率は32.4%であり、タ形は6割程度(55.9%)選択されている。また、(40. 昨日からずっと店の前にゴミが落ちる)と(41. 太郎は今日眼鏡をかける)の場合、テイタ形の選択

率は 35～50%ほどであり、現在の結果残存だけではなくて、過去の完成相や結果残存としても捉えていることが分かる。一方、学習者の場合は、全体的に見ると、テイル形では、4年生でも母語話者の選択率との差が 30 ポイント程度開いている。しかし、学習者のどのグループでも提示されたペルシア語の訳が現在完了形であるため、文の「結果残存」というアスペクト的な意味は認識しているが、変化動詞が前接したテイル形の場合、母語話者より進行中の意味に捉えやすいと考えられる。

結果残存のテイタ形の場合は、(42. 今朝、店の前にゴミが落ちる)と(43. 太郎は昨日眼鏡をかける)の母語話者におけるテイタ形の選択率は 90%を超えているが、(43. 太郎は昨日眼鏡をかける)の過去の完成相としてのタ形の選択率も 38.2%である。

(42. 今朝、店の前にゴミが落ちる)では、学習者は過去完了をペルシア語の訳として提示しており、文のアスペクト的な意味を正しく認識しているにも関わらず、テイタ形の選択率は3年生、4年生でも同じ 50%程度しかない。一方、(43. 太郎は昨日眼鏡をかける)では、過去完了形の方がペルシア語の訳として提示されているが、(42. 今朝、店の前にゴミが落ちる)と異なって、母語話者と同様にテイタ形の選択率が高い。その原因の一つとして考えられるのは、教科書には「眼鏡をかける」という意味で例文として出てくる表現は「眼鏡をかけている/かけていた」で、「眼鏡をかける/かけた」はほとんどないから、「眼鏡をかけている/かけていた」という表現全体が固まりとして学習されている可能性が高いことである。

表 4 結果残存のテイル形とテイタ形の選択率 (%)

テイル形						テイタ形					
40. 昨日からずっと店の前にゴミが <u>(落ちる)</u> 。						42. 今朝、店の前にゴミが <u>(落ちる)</u> 。					
	1*	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	31.6	16.7	5.6	0	0	ル	0	5.3	0	0	0
テイル	26.3	55.6	61.1	53.3	85.3	テイル	0	0	0	0	8.8
タ	36.8	5.6	11.1	13.3	5.9	タ	78.9	57.9	44.4	53.3	5.9
テイタ	5.3	22.2	22.2	33.3	35.3	テイタ	21.1	36.8	55.6	46.7	91.2
41. 太郎は今日眼鏡を <u>(かける)</u> 。						43. 太郎は昨日眼鏡を <u>(かける)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	26.3	15.8	16.7	6.7	32.4	ル	0	5.3	5.6	0	0
テイル	57.9	73.7	77.8	60.0	94.1	テイル	15.8	5.3	0	13.3	0
タ	10.5	10.5	5.6	13.3	55.9	タ	47.4	42.1	27.8	20.0	38.2
テイタ	5.3	0	0	20.0	50.0	テイタ	36.8	47.4	66.7	66.7	97.1

*1: 1年生、 2: 2年生、 3: 3年生、 4: 4年生 母: 母語話者

4. 4. 完了

次に完了の場合の選択率を表 5 に示す。現在の完了の意味では、母語話者は(45. 試合はもう始まる)以外は、テイル形よりタ形を選択しているが、テイル形の選択率も 35%以上である。また、(46. 母はもう弁当を作る)、(47. 父はもう車を洗う)ではテイタ形の選択率も 40%

を超える。過去の完了の意味では、母語話者の選択率が最も高いのはテイタ形（90%以上）で、タ形を選択率は21%未満で、その差が大きい。

現在の完了（44～47）では、学習者は、母語話者と同様に（45以外）、タ形の方が選択されており、（45. 試合は今もう始まる）という変化動詞では50%程度で、それ以外は70～90%である。それに対し、テイル形を選択率はタ形より低くて、4年生でも30%以下である。非変化動詞の（44. 彼女はもう公園を走る）でも、変化動詞の（45. 試合は今もう始まる）でも、終点を持つ非変化動詞の（46. 母はもう弁当を作る）、（47. 父はもう車を洗う）でも、学習者はどの学年でも、主に現在完了形をペルシア語の訳として提示しており、文のアスペク的な意味を理解していることが分かる。このように、4年生になっても、完了の意味で、テイル形よりタ形を選択していると考えられる。テイタ形の場合（48～51）、学習期間が長くなるにつれ、（50. 私が起きた時、母はもう弁当を作る）以外はテイタ形を選択率が上がるが、4年生でも母語話者との差が20～50ポイントである。さらに、どの学年でも、どの動詞の種類でも、タ形を選択率が母語話者を上回る。特に2年生以上の学習者が動詞の訳として提示したペルシア語の形式は、過去の完了の意味を表す過去完了形で、文のアスペク的な意味を理解していると判断できる。しかし、その意味を表す形式として、テイタ形よりもタ形を使っている。このことから、学習者はこれらの場合に完了の意味があることは理解していても、テイタ形を選択できず、タ形を選択してしまうことが分かる。

表5 完了のテイル形とテイタ形を選択率（%）

テイル形						テイタ形					
44. 彼女はもう公園を <u>（走る）</u> 。 これ以上走る必要はありません。						48. 私が着いた時、彼女はもう公園を <u>（走る）</u> 。					
	1*	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	11.1	5.3	0	6.7	0	ル	26.3	5.3	0	0	0
テイル	0	26.3	5.6	13.3	50.0	テイル	5.3	10.5	0	6.7	5.9
タ	66.7	57.9	94.4	66.7	52.9	タ	36.8	31.6	55.6	33.3	14.7
テイタ	22.2	15.8	0	13.3	14.7	テイタ	31.6	52.6	44.4	60.0	100
45. 試合は今もう <u>（始まる）</u> 。						49. スタジアムに着いた時、試合は今もう <u>（始まる）</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	22.7	32.0	15.8	20.0	47.1	ル	4.8	7.7	0	0	0
テイル	22.7	28.0	36.8	20.0	70.6	テイル	0	0	0	0	5.9
タ	31.8	28.0	47.4	46.7	44.1	タ	52.4	53.8	52.6	26.7	5.9
テイタ	22.7	12.0	0	13.3	5.9	テイタ	42.9	38.5	47.4	73.3	100
46. 母はもう弁当を <u>（作る）</u> 。						50. 私が起きた時、母はもう弁当を <u>（作る）</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	5.3	0	5.6	0	5.9	ル	22.2	15.8	0	0	0
テイル	21.1	26.3	5.6	6.7	55.9	テイル	5.6	0	0	0	11.8
タ	73.7	68.4	77.8	86.7	85.3	タ	44.4	10.5	47.1	40.0	0
テイタ	0	5.3	11.1	6.7	41.2	テイタ	27.8	73.7	52.9	60.0	100

47. 父はもう車を <u>（洗う）</u> 。						51. 私が帰った時、父はもう車を <u>（洗う）</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	4.5	12.0	5.3	0	0	ル	19.0	0	0	0	0
テイル	9.1	20.0	15.8	6.7	35.3	テイル	0	0	5.3	6.7	0
タ	63.6	56.0	68.4	86.7	88.2	タ	42.9	38.5	42.1	26.7	20.6
テイタ	22.7	12.0	10.5	6.7	44.1	テイタ	38.1	61.5	52.6	66.7	91.2

*1: 1年生、 2: 2年生、 3: 3年生、 4: 4年生 母: 母語話者

4. 5. 単なる状態

最後に単なる状態の場合の選択率を表6に示す。(52. 今、彼女は母に似る)と(53. 今、家と学校はかなり離れる)はペルシア語の「形容詞+būdan (現在形=です)」に対応し、(54. 今、家の前に鉄道が通る)と(55. 今、あの川は町を2つに分ける)は現在完了形と現在形に対応するものである。また、(56. 子供の時、彼女は母に似る)と(57. 子供の時、家と学校はかなり離れる)はペルシア語の「形容詞+būdan (過去形=でした)」に対応し、(58. 昔、家の前に鉄道が通る)と(59. 昔、あの川は町を2つに分ける)は過去完了形と未完了過去形に対応する。

母語話者のテイル形の選択率は85~100%程度で、他の形式の選択率は15%未満である。過去の場合も、テイタ形の選択率が97%以上で、(58. 昔、家の前に鉄道が通る)と(59. 昔、あの川は町を2つに分ける)以外は、テイタ形のみが選択されている。

学習者は、教科書などで典型的な例として教えられている(52. 今、彼女は母に似る)と(56. 子供の時、彼女は母に似る)では、テイル形の選択率が最も高く、2年生以上ではそれ以外の形式の選択率が少ない。しかし、同じグループの(53. 今、家と学校はかなり離れる)では、4年生でもル形の選択率が30%程度あり、ペルシア語の訳は「形容詞+būdan (です)」の代わりに、「Fāsele dārad」(=距離を持つ)という表現が訳として提示されている。いずれも日本語の「離れている」に相当するものだが、「です」ではなく「持つ」という訳を提示したことは、「離れる」の場合のみ4年生でもル形の選択率が他の文より高いことの原因の一つとして考えられる。過去の(57. 子供の時、家と学校はかなり離れる)では、どの学年でもテイタ形の選択率における母語話者との差が40ポイント以上である。

(54. 今、家の前に鉄道が通る)と(55. 今、あの川は町を2つに分ける)では、学習が進むにつれ、テイル形の選択率が上がる。学習者の半分以上は現在形をペルシア語の訳として提示しているが、特に3年生と4年生になると、それに対応する形式として教えられたル形の選択率が下がる。過去の場合の(58. 昔、家の前に鉄道が通る)と(59. 昔、あの川は町を2つに分ける)も、学習が進むにつれてテイタ形の選択率が50%以上になるが、筆者が予測した未完了過去形の方がペルシア語の訳として提示されているにも関わらず、タ形の選択率も40%以上である。また、テイル形と比較すると、母語話者との差が比較的大きく、習得しにくいこと

が分かる。

表 6 単なる状態のテイル形とテイタ形の選択率 (%)

テイル形						テイタ形					
52. 今、彼女は母に <u>(似る)</u> 。						56. 子供の時、彼女は母に <u>(似る)</u> 。					
	1*	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	42.1	17.6	16.7	6.7	0	ル	0	11.1	0	0	0
テイル	57.9	76.5	77.8	93.3	100	テイル	11.1	0	0	0	0
タ	0	5.9	0	0	0	タ	50.0	27.8	11.8	26.7	0
テイタ	0	0	0	0	5.9	テイタ	38.9	61.1	88.2	73.3	100
53. 今、家と学校はかなり <u>(離れる)</u> 。						57. 子供の時、家と学校はかなり <u>(離れる)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	40.0	52.2	47.4	26.7	0	ル	4.8	0	5.3	0	0
テイル	55.0	39.1	47.4	73.3	97.1	テイル	0	4.0	0	0	0
タ	5.0	0	0	0	5.9	タ	57.1	64.0	47.4	40.0	0
テイタ	0	8.7	5.3	0	2.9	テイタ	38.1	32.0	47.4	60.0	100
54. 今、家の前に鉄道が <u>(通る)</u> 。						58. 昔、家の前に鉄道が <u>(通る)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	15.8	31.6	11.1	0	5.9	ル	0	0	0	0	0
テイル	73.7	42.1	72.2	86.7	85.3	テイル	15.8	5.3	0	0	0
タ	10.5	21.1	11.1	20.0	14.7	タ	36.8	31.6	66.7	53.3	14.7
テイタ	0	5.3	5.6	0	14.7	テイタ	47.4	63.2	33.3	53.3	97.1
55. 今、あの川は町を2つに <u>(分ける)</u> 。						59. 昔、あの川は町を2つに <u>(分ける)</u> 。					
	1	2	3	4	母		1	2	3	4	母
ル	31.8	25.9	26.3	6.7	5.9	ル	0	0	0	0	0
テイル	50.0	59.3	73.7	86.7	100	テイル	4.5	0	0	0	0
タ	13.6	3.7	0	6.7	0	タ	45.5	56.5	47.4	40.0	44.1
テイタ	4.5	11.1	0	6.7	0	テイタ	50.0	43.5	52.6	60.0	100

*1: 1年生、 2: 2年生、 3: 3年生、 4: 4年生 母: 母語話者

5. まとめ

学習者と母語話者のデータの比較では、まず、どの用法でも学習者におけるテイル形、テイタ形の選択率は、母語話者より低いことが分かる。特にテイタ形の場合、学習者と母語話者との差が大きいことが明らかになった。その原因の一つとして、次のように考えられます。テイタ形には、教科書に提示されている例文は、頻繁に出てくるテイル形の例文より数が少なく、固まりとして習得されたと思われる文がなかった。それに、授業での練習・使用する機会はテイル形より少ないため、テイタ形の様々な意味を正確に理解していない可能性がテイル形より高い。

また、結果残存や完了のテイタ形では、学習者と母語話者の選択率の差が大きく、学習者は文のアスペクト的な意味を理解しているが、その意味を表すために主にタ形を選択している。

全体的に言えば、ペルシア語を母語とする学習者には、テイル形は「進行」だけでなく「結果残存」や「完了」の意味を表すということが未習得であることが分かる。今後の課題として、特にタ形とテイル形の意味や対応するペルシア語の形式との比較についての研究が必要である。

また、この調査は単文の例文を示して形式を選ばせるという方法を取っており、被験者によって想起する状況が異なる可能性があるという問題点を持っている。従って、一つの例文がいくつもの状況を表し得るのであり、被験者が選んだ形式が、筆者が意図した形式でなかったとしても、想定された状況によっては正しい判断である可能性があるということである。そこで今後の課題として、副詞だけでなく、イラストと短いストーリーを付すことにより、特定の状況を被験者に想起させる文脈を施して分析することが必要であると考えられる。

表 7 グロスの略号の意味

略号	意味	略号	意味	略号	意味
1	First Person	DAT	Dative	PREP	Preposition
3	Third Person	GEN	Genitive	PRO	Pronoun
ACC	Accusative	INTR	Intransitive	PRS	Present
ADJ	Adjective	IPFV	Imperfective	PST	past
ADV	Adverb	NOM	Nominative	PTCP	Participle
AUX	Auxiliary	NUM	Numeral	SG	Singular
COP	Copula	PFV	Perfective	TR	Transitive

注

- (1) 表 1 では、主な文法的な形式が挙げられているが、本稿の対象にならない他の語彙的な形式（副詞や特殊表現など）もある。
- (2) ペルシア語の読み方は、五十嵐（2018）に従う。
- (3) 本稿の「現在形」は未完了の現在形で、吉枝（2011）が述べる「直説法現在形」と同じものである。直説法現在形は、現在起こっている（と話し手が認識している）動作や状態、習慣、事実、真理などについて述べる際に使う。また、確実性が高い未来の動作・状態を表すこともできる。それに対し、話し手が「疑念、願望、勧告、意見、不確実な概念、将来生じる可能性や必然性」を感じながら、主観的に、生じる可能性ある、またそれを期待・懸念すると判断した事態を述べる際に用いる「接続法現在形」がある（吉枝 2011）。
- (4) 現在完了形は、現在の時点から見て、ある動作や状態がすでに完了したことを表す（吉枝 2011）。
- (5) 未完了過去形は、主にタ形に対応している単純過去形とは異なっている。単純過去形は、過去に起きた（または、起きたと話し手が認識している）動作・状態を述べる際に用いる。一方、未完了過去形は、1) 過去における習慣、反復した動作や状態、2) 過去における進行中の動作・状態、3) 反実仮想を表す際に用いられる形式であり、単純過去形の前に接頭辞 *mī* を加えることで作られる（吉枝 2011）。
- (6) 過去完了形は過去の一定の時点における、ある動作や事象の結果や状態を表す（吉枝 2011）。
- (7) 無答の回答があった場合は、欠損値として選択率の算出からは除外した。
- (8) 学習者が動詞の訳として提示したものから、文のアスペクト的な意味を捉えたことが分か

るが、日本語母語話者の指摘でこのテストの場合、「この頃」などの副詞の方が「今」より自然であるため、今後の調査では前者のような副詞を使用することにする。

- (9) イランで出版された論文はイラン歴で登録されており、西暦をつけた書き方は先行研究(五十嵐 2018 など)を参考にしたものである。

参考文献

- 庵功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4号、pp.75-94
- 庵功雄 (2019) 「意味領域から考える日本語のテンス・アスペクト体系の記述：「母語の知識を活かした日本語教育」のために」『言語文化』55号、pp.3-18
- 五十嵐小優粒 (2018) 「類型論的観点からのペルシア語受身文の特徴づけ：出現様相と頻度を踏まえた一考察」『人間社会学研究集録』13号、pp.3-26
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号、pp.37-48
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 菅谷奈津恵 (2004) 「初級日本語学習者のテイルの習得に関する縦断研究：マラティ語、テルグ語母語話者の場合」『言語文化と日本語教育』27号、pp.170-181
- 吉枝聡子 (2011) 『ペルシア語文法ハンドブック』白水社
- Khomeijani farahani, Ali akbar (1990) *A syntactic and semantic study of the tense and aspect system of modern Persian*. PhD thesis, University of Leeds.
- رحیمیان، جلال (۱۳۸۶/۲۰۰۷) ۹ ارتباط صوری و معنایی «نمود» در گروه های فعلی فارسی، مجموعه مقالات هفتمین همایش زبان شناسی ایران، جلد ۱، ص ۲۴۴-۲۶۰.
- (Rāhīmīyān, Jalāl (1386/2007) *Ertebāte Sūrī Va Ma'na'e-e Nemūd Dar Gorūh-hā-ye Fe'lī-e Fārsī* («ペルシア語の動詞グループにおけるアスペクトの、形式と意味の関係」) *Majmu'e Maqālāt-e Haftomīn Hamāyeš-e Zabān Šenāsī* (第7回イラン言語学セミナーの論集) 1, pp.244-260.)
- رضایی، والی (۱۳۹۱/۲۰۱۲) نمود استمراری در فارسی معاصر، فنون ادبی، ش ۶، ص ۷۹-۹۲.
- (Rezāī, Vālī (1391/2012) *Nemūd-e Estemrārī Dar Fārsī-e Mo'āser* («近代ペルシア語の進行相」) *Fonūn-e Adabī* (文芸誌) 6, pp.79-92.)
- فرشید ورد، خسرو (۱۳۸۶/۲۰۰۵) فعل و گروه فعلی و تحول آن در زبان فارسی، تهران: انتشارات سروش.
- (Faršīdvard, Xosrow (1386/2005) *Fe'l va Gorūh-e Fe'lī va Tahavvol-e Ān dar Zabān-e Fārsī* (『動詞と動詞の分類、ペルシア語における動詞の変形』) Tehrān: Entesārāt-e Sorūš.)